



九条はらまち

福島県「はらまち九条の会」会報 No.248
2014(平成26)年10月3日(金)発行

■現在日本及び世界で一番のご長寿男性は、南相馬市原町区石神出身で111歳の百井盛(ももいさかり)さんです。会報No.224でも紹介させていただきましたが、百井さんは日露戦争前年の1903(明治36)年2月5日生まれ。福島県や埼玉県の県立高校長を務められ、さいたま市に在住。現在は東京都の病院に入院中ということです。■今年8月20日、「男性の世界最高齢者」としてギネス世界記録に認定されました。■大震災に翻弄されている私たちですが、ご長寿の百井さんにあやかり、負けてはいけませんね。



東京・北多摩から46名が 被災地視察と本会支援に訪問 9月24日(水) 本会と九条看板前で交流会、多額のカンパも



▲9月24日午後、南相馬市原町区錦町はらまち九条の会看板前にて。北多摩の方々には本会事務局ら8名の歓迎ぶりや、看板の大きさや立派さ、その文言に大変感激されていました。

▲挨拶される平田会長。到着は1時間以上遅れましたが、事務局員は笑顔で歓迎。看板周辺のコスモスも美しく咲いていました。

◆訪問は24日朝8時、三鷹駅前を大型バスで出発。常磐道から、9月15日に通行許可になった国道6号線を北上。放射線量の高い第一原発付近を通過し、浪江町、南相馬市小高区の被災の状況を見学。本会との交流会の後、二本松市岳温泉に宿泊。◆翌25日は、原発事故で浪江町津島地区から避難の被災者8名との懇談会を開催。帰路のバス車中で感想を述べました。一様に被災現場を踏んでの驚きや、福島支援を誓い合っていました。(報告山崎)

相馬の人達のあたたかさ感激 東京都・北多摩東退職教職員の九条の会

代表・立川市 青柳正夫

私たちは昨年「いわき支援の旅」に引き続き、今年は「南相馬復興支援の旅」を企画しました。旅の内容とコースで悩んでいた時、「はらまち九条の会」平田会長に相談すると、川崎市に避難されている山崎健一さんを紹介されました。山崎さんは関東でも南相馬や福島県の惨状を知って頂くため、さまざまな活動を行っているという方で、2日間の企画やコースのすべてを快く引き受けて、何回も相談を重ね、80ページの資料を作成し、それにそって現地を案内してくれました。

そしていざ、浪江と南相馬で見るもの、聞く話のどれもが強烈なショックで脳裏に強く焼き付けられました。豊かな実りのはずの相馬の田畑は、震災の日のまま、捨てられたように放置され、荒地になっていました。あまりにも無残な光景に、みんなは押し黙ってしまいました。同時に案内して下さった志賀勝明さんや佐藤青年の説明や

体験のお話にも大変感銘を受けました。

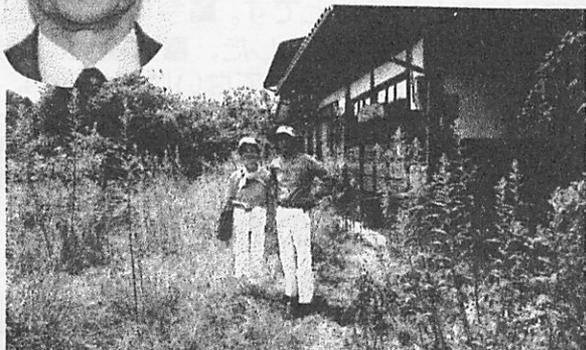
また、「はらまち九条の会」の皆さん方が、立看板のところですと私たちを待っていてくださったとはつゆ知らず、請戸小学校など被災地をしっかりと見ておきたいということで、予定が遅れてしまい、1時間以上も待たせてしまったこと、会長様の心からの歓迎の挨拶、全員揃っての記念写真、慌ただしい時間でしたが、相馬の人達のあたたかい気持ちが伝わってきました。本当にありがとうございました。

2日目は二本松市で、原発被災者の酪農や農業の生々しい悲惨なお話を聞くことができました。

そして東京へ戻る車中では、全員が感想を出し合いましたが、共通していたのは、元通りに南相馬や被災地が早く人が住めるように復旧させることでした。私たちは、南相馬で知ったことを多くの人達に広めて行きます。今こそ平和憲法を守り、脱原発を強く訴え、再び戦争をさせないためにがんばります。その力を今回の旅でたっぷりいただきました。皆さんに心から感謝しています。これからもいっしょにがんばりましょう。(9月26日記)

思い出多き古里“小高”も、小中高校もなくなるなんて

福島市蓬莱町・アマチュア写真家 渡部幸一さん(73歳)



▲南相馬市小高区大富、一時帰宅の自宅前にて。

金房小学校鳩原分校・金房中学校
そして列車通学で双葉高校へ

私の古里は、相馬郡金房村大富（現・南相馬市小高区）。そこから、30分くらいかけて近所の同級生とおしゃべりをしながら、金房村立金房小学校鳩原分校に通った。

道路は砂利道で、雨の後には小川の水が溢れて道に溜まっていた。その中にドジョウやフナがピクピクと跳ねていた。中学校は金房中学校だが、家からは遠かった。それに本校から来た輩の中には、「分校、分校」「分校マッチ箱」などと、バカにする者もいた。

高校は、県立双葉高校。常磐線小高駅からSLに乗って双葉まで通った。定期券で汽車に乗れることが夢のようだった。一度、機関士にムリを言って、機関車の運転台のところにさせてもらったことがあった。真っ赤に燃えているあの釜の中とトンネルの中がとても煙かったことが、今でも忘れられない。

なんで村から逃げなきゃイケネ〜ンダ！
自由に自分の田畑の物が食エネ〜ンダ！

その思い出多い古里が今はない。自由に入ることすらできなかった。天災と人災の大きな爪でえぐり取られた。家は傾いたまま、庭も畑も田んぼも草ボーボー。あのSLの走っていた線路は、まだ砂に埋まったまま、常磐線小高駅には、高校生の自転車が今でもそっくり残っている。船は陸に上がって横たわっていた。よく海水浴などで行った名勝松川浦も大きな爪痕を残している。

1000年に一度の天災だけならあきらめもつく、すぐ復興にとりかかれる。でも、なんで自分の村から逃げなきゃイケネ〜ンダ。なんで自由にワゲの田畑のものが食エネ〜ンダ！？

役人らは被災の現状を見ているのか

だいたい国の役人や電力会社の幹部の中で、あの誰もいない、雑草しか生えていない、イノシシやハクビシンやネズミどもに荒らされた集落に足を運んで、自分の目で「現状」を見た人は何人いるんだ。「20m以下は安全だ」と裁判で言っているが、そんなら自分が来て住んで見たら。自分の子どもをここで育ててみたら。みんな、そう言ってるよ。



手塩にかけて育てた牛を、「殺処分しろ」と言われた酪農家の気持ち、キャベツや桃や柿を「売ってはダメ」と言われた農家の気持ち…わかりますか。

ば学▶浪江町立請戸小
校の黒板のこと
涙が出ます。



「いい学校だったよ」「請戸小学校を卒業できて俺は誇りに思う」「必ず帰って来るぞ」と黒板にいった浪江町立請戸小学校の卒業生の気持ち、わかりますか。この黒板にカメラを向けていたら、小・中・高校と学校がなくなってしまった自分と重なって、シャッターを押す指が一瞬止まり、涙が出てきました。

孫やひ孫の未来人に伝えるため
「フクシマの怒り」を撮っています

でも、世の中は「捨てたものではない」と思ったのは、大飯原発の再稼働差し止め判決です。「ひとたび深刻な事故が起これば多くの人の生命、身体やその生活基盤に重大な被害を及ぼす」と判決は断じています。いつまでも悲しんではいられません。どんな小さなことでも「できることから始めよう」と、全国が動き出しています。人間の英知は「危ないもの」から「安全・安心」なものへ必ず到達できます、やる気さえあれば…。私はそれを信じて。孫やひ孫、そして多くの「未来人」に冷厳な「今」を伝えるために「フクシマの怒り」を撮りました。